



No.331

名探偵になろう



みなさん、名探偵と言ったら、誰を思い浮かべますか。みんな、様々な探偵を思い浮かべるのではないのでしょうか。「今回は探偵の話なのか」と思ったみなさん。ごめんなさい。「国語」に関するお話です。「えーっ、国語と探偵って、いったいどんな関係があるの?」と思いますよね。それはこれを読んでいけばわかります。国語の文章読解問題を苦手としている人に、とくに読んでいただきたいお話です。

読解問題に取り組むにあたって、絶対に守ってほしい「三つのルール」というものがあります。読解問題が得意な人は、この「三つのルール」をしっかり守っているのです。

一 問題文を最後までしっかりと読む

「えーっ、しっかりと読んでいるよ」とほとんどの人が思いましたよね。確かにしっかりと読んでいると思いますが、途中まではね。一つ例を挙げますね。

問い 文中の「A」に当てはまる言葉を……
 たいいていの人は、この辺りまで読んだら、問

題文から目を切ってしまうのです。「……」の部分に重要なことが書かれているというのに。例えば「二段落から抜き出しなさい」とか「十字で書きなさい」とかね。

日本語というのは最後に大切なことを伝える言語です。最後までしっかりと読みましょうね。

「問題文を最後までしっかりと読むことが大切なのはわかったけれど、それが探偵とどう関係があるの?」と思ったみなさん。非常に関係がありますよ。事件が起こったら、探偵はまず何をしますか。関係者の話をしっかりと最後まで聞きますね。言葉のすみずみまで、聞きもらさないようにね。読解問題を解く際は、探偵になったつもりで最後までしっかりと問題文を読んでください。

二 答えを文章中から探す

国語の文章問題に必ず書かれている一文があります。「次の文章を読んで、後の問いに答えなさい」という文です。これは、問題作成者と問題解答者であるみなさんとの契約なのです。「次の文章を読んだら、後の問いに答えられるから、しっかりと読んでね」ということなのです。したがって、国語の答え、または、答えの根拠は文章中にあります。みなさんはそれを探すだけでいいのです。ところが、文章中から答えを探すこともせずに、テスト中に天井をボーッと眺めているだけの生徒がたまにいます。見るに見か

ねて「集中してやろうよ」と一言注意をすると「今、考えているんです!」と逆ギレ(笑) 「数学」では「考える」という動作が必要かも知れません。「社会」なら「思い出す」という動作が必要かも知れません。しかし、「国語」では「考える」「思い出す」は必要ありません。「探す」のです!

「これが大切なのはわかったけれど、それが探偵とどう関係があるの?」と思ったみなさん。

これも非常に関係がありますよ。関係者から話を聞いた探偵は、次はどんな行動をとりますか。犯人というのは必ず現場に証拠を残します。探偵はそれがわかっていいるから、現場を隈なく探します。では、みなさんにとっての現場ってどこ? 「文章でしょ!」文章から答えを一生懸命探してくださいね。

三 「なんとなく」禁止!

「〇〇くんは答えを『ア』にしているけれど、どうして『ア』を選んだの?」と聞くと、たいてい「なんとなく」と答えます。「〇〇さんは答えを『イ』にしているけれど、なぜ?」と聞くと、「それっぽいから」と。〇〇くんが答えを『ウ』にした理由は? 『ウ』という答えがまだ出ていないから」もはやこれは国語でもなんでもないですよ。

先ほど、答えは文章中にあると述べました。ですから、それをふまえた上で答えを導き出し

てほしいのです。例えば、こんな感じ。「文章中の三行目に〇〇と書かれていたので、『ア』を選びました」「『イ』については述べられていませんが、他の選択肢の内容は一切文章中になかったため、『イ』を選びました」というふうに答えられるようになってほしいのです。

「これも大切なのはわかったけれど、それが探偵とどう関係があるの?」と思ったみなさん。もちろんこれも非常に関係がありますよ。探偵が「あなたが犯人です!」と容疑者を追いつめるシーンがありますね。そのとき容疑者は「なんか証拠があるのか? 証拠を見せてみろよ!」と言い返します。それに対して、探偵が「なんとなく」なんて言いますか。

言いませんよね。きちんと根拠をもって犯人を特定しますよね。みなさんも探偵と同じように根拠をもって答えを特定するようになってください。

このように、読解問題に取り組むときは、探偵のように取り組んでみてください。さっそく明日から始めてみましょう。

(村田)



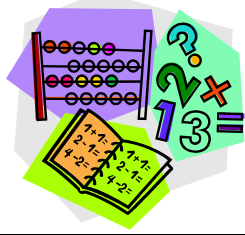
数学が苦手なら

先月、全国模擬授業大会が開催されました。その大会で創学舎の講師が最優秀賞を受賞し、

団体戦も第二位でした。私も授業や見学で数回参加しています。そこでは、授業の技術力を争うのですが、一方見学者の印象に残るための演出も必要となります。各科目で最優秀賞や優秀賞が出るなか、数学の講師がトップに立つことはほとんどありません。それは、数学という科目が余計な演出を加味しにくい科目であること、を表しています。

しかし、大会ではなかなか上位に食い込めない数学ではありますが、逆に言うとなんかどうやっても、論理的に積み上げていけば同じところにたどり着けるということを表しています。余計なことを省き、大事なところに気付けば、きちんとできるようになるのです。つまり、何もないところから、ひたすら覚えるのではなく、きちんと筋道を立てて考えていくことで答えまでたどり着ける科目なのです。

たとえば、加減乗除の四則がきちんと理解できて(これには基本の訓練が必要です)、さらにルールとして、①「計算は原則前からする」、②「かけ算わり算はたし算ひき算より先にする」などを知っていると、 $8-2 \times 3$ のような計算が問題なくできるようになります。ちなみに答えは「2」。これが生徒たちの間違いを見ると「18」になっていることが多い。お分かり



でしょうか。この間違いは、ルールの①は適用したが、ルールの②を適用しなかったことに原因があります。

このように簡単な例で見ましたが、基本の訓練と、ルール(約束)が理解できれば、数値が変わってもいつでも正解を出せるようになります。だから、 $12-4 \div 2$ になったからできませんということにはならないわけです。

さて、長々と前置きをしてしまいましたが、結局何が言いたいのかというと「きちんとルール通りに考えることができれば誰でもできるようになる」のです。数学ができるようになる初めの一歩は、きちんとルールを理解することです。これは、外せません。友達同士で集まり、トランプで大富豪(大貧民)をやるときも、何をするとときも基本的なルールの確認をしますよね?それと同じです。

このルールの理解が中途半端だったり、自分の解釈でルールを捻じ曲げたりすると正解にはたどり着けません(友達同士だったら喧嘩になります)。だから、授業でもまず、基本的なルールの説明をして、それを今回の問題に当てはめるとこういう解答になるというような説明がなされていくのです。

ここまで、読んでこられた方の中には、もっと思考力など考える力も必要だろうと思っただろうか?勿論、子供の立場から自分の親を判断す

と言え、言語力、語彙力など、様々な力が必要です。それらが必要ないというわけではありません。

数学が苦手な人は、まずルール通りに考えてみてくださいという提案です。ルールが分からないのに何問も問題を解いてもできるようにはなりません。講師に質問してルールを理解して、実際に問題を解いてみてください。きっとできるようになっていきます。(松永)

親が口うるさい理由②

●親はみんな、子供の成長を願い充実して安定した人生を送ってほしいことを願う。だからこそ、身に付けてほしいことを、子供が習得できるように努力するのである。そして、その努力は大半が、子供に対する命令の形で行われる。子供は命令しなくてほしいと思うが、親の側にはある意味仕方ないことである。何故なら、親は自分の子供に対して一直線だからである。

自分にとって、大切にかけがえのない存在。親が少し未熟な場合は、子供は自分の分身、自分の所有物ときえ思うものである。さらに、親の人生に満たされない所があると、子供は、親自身の幸福感を左右する存在ともなるのだ。ところで、自分の親はどうか?親としての自分はどうか?勿論、子供の立場から自分の親を判断す

るのは現時点では難しい。だが、親自身は、自分のことを振り返ってみることが必要だと思う。

●さて、成長のことは続けよう。小学3、4年生になると、成長の基準が変化してくる。周囲では、中学受験の話が出始め、受験に成功した家庭のことが魅力的な事例として聞こえてくる。そう。学力や成長が、その先にある学歴が成長の基準の一つとしてほとんどの親の頭に入ってくるのだ。徐々に。それは何故か。いろんな理由がある。学力や成績が上位のほうが、より高い学歴を手に入れる可能性が高くなる。より高い学歴が手に入れば、安定した職業につける可能性が高くなり、選択の可能性も広がる。いろんな集まりの席で、若者が就職の報告をしてくれることがあるが、それを聞いた大人の反応は興味深い。「よかったね。」「おめでどう。」「そのあとは、十中八九、「これで一生安心。」「〇〇家も安泰だね。」と続く。

まさに安定、安泰が大人の、親の最大の関心事であることが分かる。(勿論、健康や一定の人間関係力が前提となつてはいるが……)。(以下、次号に続く)

(小林(健))



▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡下さい。